

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2012年7月)

発表日2012年9月10日(月)

～経常黒字は当面低水準での推移が予想される～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 エコノミスト 大塚 崇広
TEL : 03-5221-4525

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支
					貿易収支	サービス収支	
11	1月	5,478	12,911	3,498	3,684	▲ 186	10,452
	2月	17,008	12,473	3,718	4,865	▲ 1,147	11,072
	3月	17,386	9,485	▲ 1,282	528	▲ 1,811	11,349
	4月	4,239	5,755	▲ 6,041	▲ 4,650	▲ 1,390	12,613
	5月	5,744	3,525	▲ 7,517	▲ 6,314	▲ 1,203	11,945
	6月	5,389	9,590	▲ 1,107	35	▲ 1,142	11,670
	7月	10,537	8,237	▲ 2,263	▲ 582	▲ 1,681	11,385
	8月	4,363	6,971	▲ 4,008	▲ 2,059	▲ 1,949	11,808
	9月	16,107	10,255	▲ 1,210	227	▲ 1,438	12,250
	10月	5,339	4,703	▲ 7,409	▲ 5,363	▲ 2,046	12,717
	11月	1,261	5,123	▲ 5,920	▲ 4,047	▲ 1,873	12,193
	12月	2,657	6,991	▲ 4,271	▲ 2,441	▲ 1,829	12,367
12	1月	▲ 4,556	1,209	▲ 7,914	▲ 7,056	▲ 858	10,476
	2月	12,026	8,757	▲ 2,421	▲ 496	▲ 1,925	11,605
	3月	13,074	4,879	▲ 4,991	▲ 3,775	▲ 1,216	10,815
	4月	3,338	2,886	▲ 8,498	▲ 5,558	▲ 2,940	12,296
	5月	2,151	2,822	▲ 6,452	▲ 4,498	▲ 1,954	10,561
	6月	4,333	7,736	▲ 3,619	▲ 1,666	▲ 1,953	12,135
	7月	6,254	3,354	▲ 7,557	▲ 4,769	▲ 2,788	11,807

(出所)財務省「国際収支統計」

○ 7月は経常収支は季節調整値で前月から黒字幅が縮小

7月の経常収支は原数値で6,254億円の黒字と、コンセンサス(4,711億円、レンジ:2,600億円~7,350億円)を上回る結果となった。ただし、季節調整値でみると、3,354億円の黒字と前月(7,736億円)から黒字幅が縮小しており、均してみても低水準の黒字が続いている。主因は貿易赤字の継続であり、特に足元では輸出の回復力の弱さが目立つ。

貿易収支の内容を季節調整値でみると、輸入金額は原油価格が一時期と比べると落ち着いていることを反映して一段の増加には歯止めがかかっている。一方、海外経済の足取りの鈍さを背景に輸出金額の伸び悩みが目立つ。既発表の通関統計で地域別の実質輸出(実質化と季節調整は当社試算)の推移をみると、これまで輸出の牽引役であったASEAN向けやアメリカ向けに陰りが窺えることに加え、EU向けが減少しており、中国向けも冴えない動きが続いている。輸出はここへきて牽引役を失っている。

○ 貿易外収支の動向: サービス収支の赤字は足元で拡大傾向、所得収支の黒字は高水準を維持

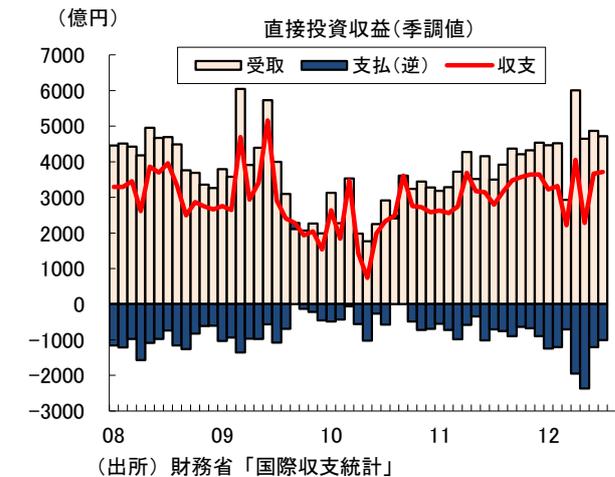
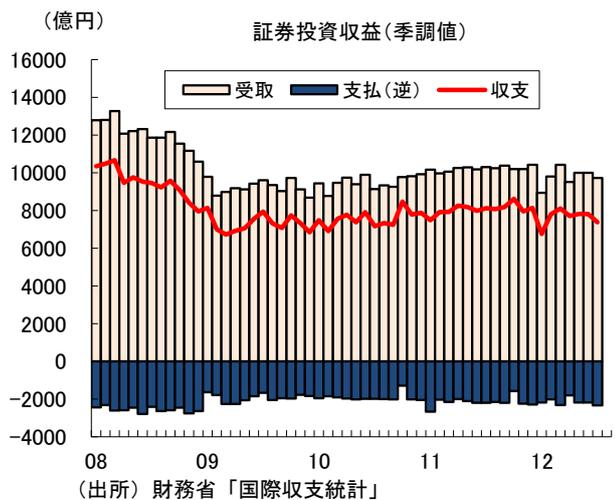
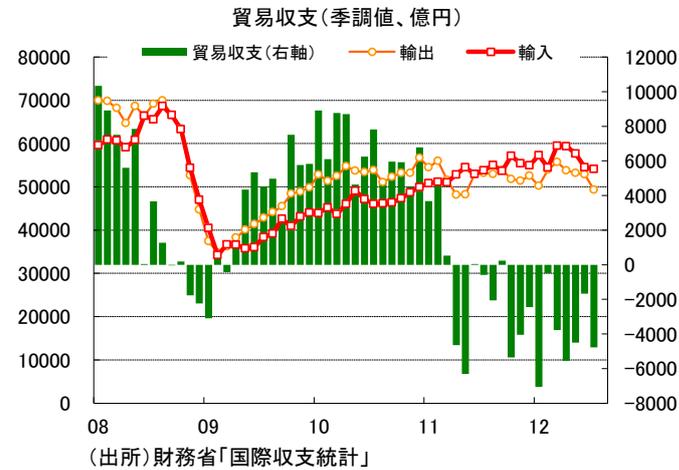
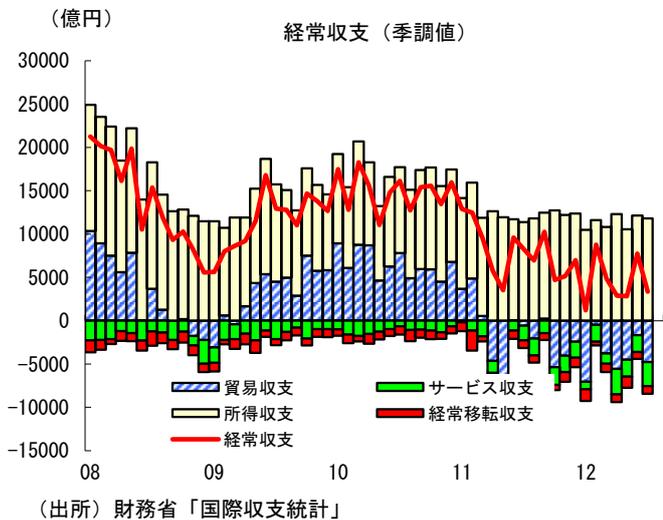
貿易外収支の内訳を季節調整値で確認すると、サービス収支は2,788億円の赤字となり前月(▲1,953億円)から赤字幅が拡大した。均してみても、サービス収支はこのところは赤字額が増加する傾向にある。出国日本人数の増加の一服を背景に旅行収支の赤字幅の拡大に歯止めがかかっている一方で、輸出数量の減少や輸入数

量の高止まりを背景に輸送収支の赤字幅は拡大傾向にある。振れの激しいその他サービス収支も海外経済の減速などからこのところは赤字が目立つ。

所得収支は、11,807億円の黒字となり前月(12,135億円)から黒字幅が縮小したものの、高水準は維持した。証券投資収益が金利の低下や円高を背景に頭打ちとなっているが、日本企業の海外進出などを背景に直接投資収益は拡大基調を保っている。

○ 経常収支の黒字は当面低水準での推移となる見込み

先行きについては、貿易収支は当面赤字基調が続こう。原発の従来水準での再稼働が難しいことなどを背景に輸入は引き続き高水準となろう。一方、輸出は海外経済の弱さを背景に回復感に欠ける動きとなる可能性が高く、貿易収支の赤字幅が縮小するペースは緩慢なものにとどまろう。高水準の黒字を保つ所得収支のうち大きなウェイトを占める証券投資収益は金利の低下などで今後も伸び悩みが予想される。直接投資収益については、対外直接投資残高が比較的収益率の高いアジアを中心に増加傾向にあり、そこから得られる収益は今後も増加基調を保つものと予想される。総じて、経常収支の黒字は当面は低水準での推移が予想される。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。